



Data

監督: フランシス・ローレンス
 原作: ジェイソン・マシューズ著 / 山中朝晶訳『レッド・スパロー (上・下)』(ハヤカワ文庫NV)
 出演: ジェニファー・ローレンス / ジョエル・エドガートン / ヤーロット・ランプリング / ジェレミー・アイアンズ

👁️👁️ みどころ

『くノ一忍法帖』と同じような(?)、ロシアのレッド・スパローがはじめてスクリーン上に登場! スパイには知恵と格闘術が必要だが、女スパイにはさらに男を性的に喜ばせるためのハニートラップの技術も…。ジェニファー・ローレンスがそんな役に挑んだことに驚きだが、『ハンガー・ゲーム』よりずっと面白い。

東側と西側のスパイが入り乱れての騙し合いは面白いし、『裏切りのサーカス』(11年)ばりの“モグラ”(二重スパイ)炙り出し作戦の展開は本格的だ。陸軍中野学校とは異質の、女スパイ養成学校での訓練に耐え、ヌードも厭わず、拷問にも屈せず、女スパイの道をひたすら歩むヒロインの姿に感動しながら、緻密な原作に基づく本格的スパイものの醍醐味を楽しみたい。



■□■レッド・スパローとは? 『くノ一忍法帖』を彷彿! ■□■

山田風太郎原作の『くノ一忍法帖』が登場したのは、日本が安保闘争に明け暮れていた1960年9月で、私が中学生の時代。男ばかりの私たちの学校の一部では、そのお色気に圧倒され、小説を回し読みしたが、さすがに映画館まで足を運ぶことはできなかった。同作ではじめて発表された忍法には、「忍法筒涸らし」「忍法天女貝」等があるが、そのネーミングだけでいかにも生唾が出そう…。?しかして、本作のタイトルとされている『レッド・スパロー』とは?

チラシでは、それを「女スパイ」と称しているが、「スパロー」はスズメの意味で、スパイの意味ではないはずだ。かつて日本には「陸軍中野学校」というスパイを養成すること

を専門とする学校があり、その物語は市川雷蔵主演で何本も映画化されたが、東西冷戦時代のソ連には「レッド・スパロー」という女スパイ養成の学校があったらしい。そして、陸軍中野学校は「謀報謀略の科学化」を目指す本格的なスパイ養成学校だったのに対し、レッド・スパローは「女の魅力」、いわゆる「ハニートラップ」を最大限に使う情報を得ることを目指す、お色気作戦中心(?)のスパイ養成学校らしい。しかして、チラシには、スパローの心得として①ターゲットの欲望を見抜け②自らの全てを使いターゲットを墮とせ③心を捨て国家のために道具となれ、が躍っている。なるほど、なるほど・・・。

3月22日に観た『セリーナ 炎の女』(14年)は、ジェニファー・ローレンス主演にもかかわらず日本では公開されず、「未体験ゾーンの映画たち2018」のみでの上映となっていたが、本作は事前宣伝もバッチリ。この手の映画が大好きな私は、直ちに映画館へ。

■原作に注目！何よりシリアスさが面白い！■

イギリスのスパイ映画として近時大ヒットしたのが、『キングスマン』(14年)(『シネマルーム37』213頁参照)、『キングスマン2』(17年)だが、はっきりいってこれは駄作だった。それに対して、ジョン・ル・カレの原作を映画化した『裏切りのサーカス』(11年)(『シネマルーム28』114頁参照)は素晴らしいスパイ映画だった。また、『007』シリーズや『ボーン』シリーズは、各作とも立派な水準を保っている。東西冷戦の「スパイもの」として面白かったのは、『寒い国から帰ってきたスパイ』(65年)や『引き裂かれたカーテン』(66年)等だ。南北に分断された北朝鮮と韓国の「スパイもの」も面白いが、東西冷戦を背景とした西側と東側の心理戦と情報戦が展開される「スパイもの」は、原作がしっかりしているものが多いだけに面白い。その醍醐味の中心は、何といってもシリアスさ。しかして、本作の原作は、33年間もCIAに勤務していたジェイソン・マッシュューズの『レッド・スパロー(上・下)』(ハヤカワ文庫NV)だ。

本作導入部では、ステージでの大ケガによって、ポリショイ・バレエ団での地位を失ったドミニカ・エゴロフ(ジェニファー・ローレンス)が、ロシア情報庁幹部である叔父のワニャ・エゴロフ(マティアス・スーナールツ)の救いの手(?)によってレッド・スパローに入るストーリーが描かれていく。そして他方では、CIA捜査官として長年モスクワで働き、今回のソ連の「二重スパイ」＝「モグラ」との接触で、“ある事故”を起こした男ネイト・ナッシュ(ジョエル・エドガートン)が命からがら(?)逃げ帰るストーリーが描かれる。本来、このドミニカとネイトの2人が出会うことはなかったはずだが、ジェイソン・マッシュューズの原作を映画化した本作では・・・?

■ジェニファーの“不思議な女の魅力”が本作のポイント■

14歳の美少女としてデビューしたジェニファー・ローレンスは、『あの日、欲望の大地で』(08年)(『シネマルーム23』38頁参照)で、シャーリーズ・セロンやキム・ペイ

シンガーという大女優と堂々と渡り合っていた時から大注目の女優だった。彼女は『ハンガー・ゲーム』（12年）（『シネマルーム29』234頁参照）シリーズで世界的な女優になったが、本当はアカデミー賞主演女優賞を受賞した『世界にひとつのプレイブック』（12年）（『シネマルーム30』30頁参照）や、アカデミー賞主演女優賞にノミネートされた『ウインターズ・ボーン』（10年）（『シネマルーム27』59頁参照）、そして、アカデミー賞助演女優賞にノミネートされた『アメリカン・ハッスル』（13年）（『シネマルーム32』33頁参照）等の方が味わい深い作品だった。なぜなら、ド派手なアクションで魅せてくれるのも悪くないが、ジェニファーには各作品ごとに異なる“不思議な女の魅力”があるからだ。

それは本作でも同じ。そもそも、イギリス生まれのハリウッド女優がロシア語を喋ること自体が異例。そして、冒頭の舞台で本当にバレリーナとしての踊りを見せてくれるのが異例なら、厳しい監督官（シャーロット・ランプリング）が指導するスパイ養成学校で、全身ヌードはもちろん、男への性的奉仕も辞さない過酷な訓練の数々へのチャレンジも異例。そこには、『G. I. ジェーン』（97年）で女性初の海兵隊員役に挑んだハリウッド女優デミ・ムーアの肉体的苦勞とはまた違う苦勞があったはずだ。『セリーナ 炎の女』では、製材所の実務がわかるうえ経営手腕も抜群という、まさに“炎の女”を演じていたが、本作ではセリフの量を極端に抑え、知恵と工夫で苦しい局面をくぐり抜けていく女スパイ役を見事に演じている。

本作は、東西冷戦下での“モグラを探し出せ”というスパイ同士の騙し合いがメインテーマ。しかし、同時にCIAのベテラン捜査員ナッシュとロシアの女スパイ・ドミニカとの“真実の愛”（？）という要素も絡めているので、ジェニファーの演技力と彼女の“不思議な女としての魅力”がますます注目されることに。この手の映画では、「二重スパイ」の疑いがかかるのは当たり前。そして、そうなった場合の拷問の厳しさも当たり前。したがって、ナッシュはもちろんドミニカ・エゴロフにもそんなシーンが登場するが、その迫力は相当なものだ。ヌードシーンにニヤニヤするだけでなく、そんなシリアスなシーンもしっかり確認しながら、“不思議な女の魅力”を発揮するジェニファーのレッド・スパロー役をしっかり楽しみたい。

■□■モグラは誰だ！女スパイは寝返るの？■□■

司馬遼太郎原作の『坂の上の雲』では、秋山真之と同期で海軍兵学校を卒業した親友の広瀬武夫が、海軍の駐在武官としてロシアに赴任する物語が登場する。広瀬はロシアで美しきロシア人令嬢アリアズナと恋に落ちるが、対ロシア戦での重大な任務に就くため、泣く泣く2人は別れることに……。本作では、ドミニカとナッシュとの間でそんな悲恋物語とは全く異質の、スパイ同士のどこまでがホントでどこからがウソか全くわからない恋物語が、“モグラ発見作戦”と並行して展開されるので、それにも注目したい。

ドミニカの類いまれなるスパイとしての才能を感じ取り、それを伸ばそうとしたのは、同じ任務に就いていた叔父のワーニャ。導入部で命からがら逃げ戻ったナッシュは、ロシアで接触していた“モグラ”の命が危うくなることを危惧し、新たな任務に復帰することを希望していたが、さてこの“モグラ”は一体誰？本作はこれが全く明らかにされないままストーリーが進行していくので、若干のイライラ感も出てくるが、その分ラスト近くでそれが明らかにされると一気に緊張感が高まってくる。『裏切りのサーカス』でも“モグラ”を巡るストーリーが最高の面白さを見せていたが、それは本作も同じだ。本作後半からは、ナッシュと恋仲になっていたドミニカが西側のスパイに寝返ったのではないかと疑われたのは当然。そして、いったんそんな疑いで拷問を受ければ、二度と復活はありえないはずだが、そこで見せるドミニカの才覚とは？ワーニャもそんな姪っ子の暴走ぶり(?)を見限り、自分自身の保身に走ったようだが、さてその結末は？他方、ドミニカは“モグラ”の名前を白状することを最後まで拒否したが、そんな状況下でロシア側が炙り出したモグラの正体とは・・・？

本作は『くノ一忍法帖』ばりのハニートラップの面白さと、ジェニファーの不思議な女の魅力の映画。私はその程度の期待で本作を鑑賞していたが、なんのなんの。これはモグラ探しの本格スパイ映画としてもなかなかのものだ。もちろん、そのネタバレは厳禁なので、本作後半からクライマックスにかけての面白さは、あなた自身の目でしっかりと。

2018(平成30)年5月9日記